

2025年度「自由を生き抜く実践知大賞」ノミネート一覧 実践事例概要

*Noは実践事例名称の五十音順

No O	実践事例名称(50音順)	実践主体	取り組み内容(500文字以内)	実施しての感想(500文字以内)	実践事例資料
1	駅から地域へ、人とをつなぐ地域社会貢献	東京メトロ飯田橋駅ボランティア	東京メトロ飯田橋駅ボランティアは、東京地下鉄(株)協力のもと、飯田橋駅構内でお客様のご案内業務を行っている。この活動を通して様々なバッゲーランドを持つお客様が1つの飯田橋駅を利用していることに気づき、人と人が交わる場所で駅からさらに地域へ広げたいと考えた。そこで、今度は神田仲町駅の第36回すずらん祭りに初参加し、東京メトロ全路線のマークを使った「神奈祭翁カードゲーム」を実施した。今回の初参加があくまで企画立案から準備、企業との交渉まで、すべて学生の手で実施した。特に年少者から高齢者まで幅広い世代が集まる祭りの特性を踏まえ、「ぶりがなや色覚」パブリックアートによる祭りの特徴を用いて、誰もが楽しめるシンプルな内容によるよう工夫した。当日は祭りに訪れた多くのお客様とのゲームを通じ、日頃の駅構内でも開催したボスピラリエ経験を活かしたコミュニケーションを実践することで人と人の交流が促進された。さらに、活動を共にした学生同士の交流も深まり、回体の結束が高まった。こうして駅を超え、地域社会に開かれた交流の場を持つことができ、駅から地域へ広がるボランティアの新たな可能性を体現する取り組みとなつた。	私たちは日頃の活動を通して駅で多様な人々と接し、「人と人のつながり」を体感している。その中で、駅という日常空間を飛び出し、地域のお祭りに参加したことで、世代を超えたつながりが生まれた。とりわけ、子どもたちが楽しそうにメトロ路線を学ぶ姿や、高齢者からの「学生が祭りに関わってくれるのは嬉しい」という声は、大学ボランティアならではの存在意義を感じた。また、ぼやけて見える路線出口の色には、美は色見多様性への配慮があることを伝えると、驚きの反応があり、日常のちょっとしたマークへの関心を高めることができた。こうしたやりとりを通して、私たちの活動に対する多様な人々への理解と共感を地域で広げられた感じる。さらに、日頃の駅でのボランティア活動で培った相手に合わせた対応力を活かすことで、円滑に案内を進め、ゲームを分かりやすく説明することができた。同時に子どもに目線を合わせて説明する。親子連れには複数人で対応するなど、主に年少者とのコミュニケーションにおいて、駅での活動に還元できる点にも気づいた。今後も、駅と地域を、人と人々、つなぐ存在として『自由を生き抜く実践知』を体現できるよう尽力していく。	・法政大学ホームページ https://www.hosei.ac.jp/volunteer/pickup/article-20250610100844/
2	草ストローを用いた高大連携企画	現代福祉学部 佐野竜平ゼミ	2023年10月から2025年にかけて、多摩キャンパスの教員・職員・学生(佐野ゼミ、多摩OCL)が協働しながら、草ストローを用いた高大連携企画を実施した。草ストローは、①100%自然由来の成分②バターナムの障壁者が生産工程に携わっている③使用後はゴミとして処分せず、堆肥にすることができるという特徴を持っている。このような草ストローを教材として成瀬高校・桜美林高校・工学院大学附属高専と高大連携をし、それぞの高校の特徴に合わせた企画を実施した。成瀬高校と桜美林高校は「総合的な学習(探究)の時間」の一環であるため、研究の基本である観察、仮説、検証、考察、結論に当てはめて説明した。その後、この中の検証のプロセスの一端であるボスターを作成して高校生に担つてもらった。工学院高校はキヤリア教育の一環であることと理系要素が強いということで、動画作成ワークと草ストローを土に選ばず体験を行った。参加した高校生には大学での学びや探究活動を身近に感じてもらうことができた。今後も草ストローが生産されてから、使用され、土として還り、新たな場所で使用されるという循環型＆インクルーシブキャンパスを実現していきたい。	高校生たちが限られた時間の中で草ストローの魅力を一枚のポスターにまとめようと懸命に考えていく姿に、大きな刺激を受けた。キャッチーな言葉を生み出そうとしたり、背景を工夫して見やすくしたり、自分たちの想いを言葉やデザインに凝縮する姿勢から、環境問題やSDGsに真剣に向き合っていることが伝わってきた。短時間で本質をからえて表現を生み出すのは難しいが、それに挑む高校生たちの姿から、私自身も「一言の力の大切さを改めて実感した。この経験を通じて、高校生が物事を本質を定め、周囲の人々に伝えることができるかを経験して積むことは大変意義深い」と思っている。こうした学びが、彼らの今後の道筋選択や社会に出たときの行動につながり、持続可能な未来づくりに貢献するきっかけになることを期待している。さらに、このように高い高大連携企画は、高校生にとって大学を見る機会や将来を考える契機にもなる。また、自ら考え行動する経験が積み重なることで、将来社会に出たときに大きな力となり、持続可能な未来を切り拓いていく鍵になると考える。今後も引き続き、さらに高校生たちの柔軟な視点を取り入れた企画を開いていきたい。	・桜美林高校と本学学生の交流会を多摩キャンパスで実施しました https://www.hosei.ac.jp/tama/pickup/article-20231207153825/ ・工学院大学附属高校とのゼミ体験会を多摩キャンパスで実施しました https://www.hosei.ac.jp/tama/info/article-20240111171318/ ・【高1】キャリアプロジェクト@法政大学 https://kogakulin-jsh.hatenablog.jp/entry/2024/01/19/102350 ・都立成瀬高校と本学学生との交流会を多摩キャンパスで実施しました https://www.hosei.ac.jp/tama/info/article-20241018101540/
3	実践型高大連携講座の構築・推進	理工学部電気電子工学科・国際高理科共同	国際高・理工学部電気電子工学科で、高校生の研究室体験、及び高校生が研究室の一員として学ぶ研究講座を実施した。2023年6月に国際高へ出張していた鳥飼先生と落合の立ち話から企画は始まり、2024年1・2月に国際高で行われた3年4期授業において、「小金井キャンパス研究室体験を開講した。その結果、6名の高3生が週に4回研究室を体験することができた。その後生徒から「この講座が開かれたかった」という振り返りをうけ、2024年の8月には、1~2年生を対象として研究室体験を実践。21名の生徒が2日間で研究室を体験した。ここでは「もっと深く研究室を体験したい」という要望が生徒からあった。	講義ではなく「生徒が実際に手を動かし、実際に触れ、主体的に学ぶ高大連携講座」を作り上げ、実践を実施した点が非常に有意義であった。また高校での単位認定もできる形で実践した点も、評価に値する。	・桜美林高校と本学学生の交流会を多摩キャンパスで実施しました https://www.hosei.ac.jp/tama/pickup/article-20231207153825/ ・近年人では多くの高校で大学が高大連携プログラムを実践しているが、それらは講義やガイダンスなど、生徒が「聞くスタイル」のものが多い。研究室へ参加するとしても、1~2回の大切さを改めて実感した。この経験を通じて、高校生が物事を本質を見定め、周囲の人々に伝えることができるかを経験して積むことは大変意義深いと感じている。こうした学びが、彼らの今後の道筋選択や社会に出たときの行動につながり、持続可能な未来づくりに貢献するきっかけになることを期待している。
4	就活ラジオ番組「脱力就活」の運営	脱力就活製作委員会	「脱力就活製作委員会」は、法政大学の学生のみ(全35人)で構成され、2023年7月から公共ラジオ局「浩谷クロスFM」で学生の就活をテーマにした毎週放送のラジオ番組、「脱力就活」を制作・運営しています。	私たちは自身が学生であり、課題に関わる当事者であるという点を、活動の最大の強みであり、強い動機としています。脱力就活製作委員会は、自分たちが解決したい課題は何か、学生だからこそできることは何かという問い合わせに本気で向き合って活動しています。	・番組公式インスタグラム https://www.instagram.com/datsuryoku_shukatsu?igshid=MMWw2YXhvcnK5Mw9vNw== ・ウェブホームページ https://shibuyacrossfm.jp/program/sun/21.php
5	受刑者の社会復帰を子どもと考える共生教育	キャリアデザイン学部遠藤ゼミ有志8名	2025年9月、山口県美祢市立豊前小学校、大嶺中学校にて、「社会復帰した受刑者と共に生できるか」というワークショップを、遠藤ゼミ有志8名が行つた。法務省や山口大学との共同プロジェクトで、学区内にある刑務所に収容されている受刑者との、フラワーアレンジメントの贈呈という交流の意味を考えるものであった。これに向けて3月から半年間、学生は各地の刑務所と関係機関を取り次ぎ、受刑者ともインタビュートを行つた。22本の調査をもとに、小学生・中学生・高校生向けのプログラムを策定した。犯罪者の社会復帰を妨げるものの社会の偏見があり、いかに彼らを受け入れられるかは重要な社会課題である。同時に、悪意をしてはいけないという道徳と相反しないチームでもあり、学校教育にてこれを取り扱われたことはなかった。今回も、教育委員会や学校関係者の奥深いものがあったが、取り返し協議を重ねながら相互理解を深めた。プログラムでは子どもたちが真正面から「受刑者に書いたメッセージを大学生が読む」という形式で、学生に身近に感じてもらおうとした。現在、伊藤研のPBLにも高校生が参加し、高大連携の規模を拡大している。	プロジェクトが立ち上がったとき、大学生の参加は任意としたが、思いがけず多くの立候補者がいた。異文化圏交流・障害者支援・LGBTQ当事者の生活障害の除去・共生には様々な側面があるが、「犯罪を犯した人たちその後の支援」は、参加する大学生にとって身の負担となる心配もあり、取り組みについて懸念があった。自分の偏見と向き合いたい。自分の生きづらさを考慮したい、自分が立場とするもので、これまで達成できたのは、時間割の自由度が高い国際高・Zom等ツールの活用、対等な立場で改善点を伝えてくれる高校生、多忙な中で高大連携のため奔走してくださる理工学部の先生など、多くの法政らしい自由さがあつてこそある。この土壤を活かし、法政全体での教育の発展を目指すことを指して、より機的な高大連携や関連施策を今後も推進していきたい。	・美祢市ホームページ https://www.2.city.mine.lg.jp/soshiki/somubu/chihousou/usei/kyouseisousei/11984.html https://www.2.city.mine.lg.jp/soshiki/somubu/chihousou/usei/kyouseisousei/12653.html
6	セクシャルマイノリティ&アライの居場所	法政レインボーほっとラウンジ学生スタッフ	法政レインボーほっとラウンジは、セクシュアルマイノリティや、そうかも?と思っている人&アライのための居場所である。	ここでは「ほっと」できる居場所としてだけでなく、その場に集まる学生の多様な声を直接聞くことで、感覚的な理解が得られ、自らの共感が広がる。そこには、学生の多様な声が広がる。この姿勢は、法政大学憲章が掲げる「自由を生むべき実践知」をまさに体現するもので、これまで達成できたのは、時間割の自由度が高い国際高・Zom等ツールの活用、対等な立場で改善点を伝えてくれる高校生、多忙な中で高大連携のため奔走してくださる理工学部の先生など、多くの法政らしい自由さがあつてこそある。この土壤を活かし、法政全体での教育の発展を目指すことを指して、より機的な高大連携や関連施策を今後も推進していきたい。	・正式名称:法政レインボーほっとラウンジ ~セクシュアルマイノリティや、そうかも?と思っている人&アライのための居場所」 [開催報告]5月、6月の法政レインボーほっとラウンジ https://www.hosei.ac.jp/diversity/info/article-20250718151839/ [開催報告]7月多摩キャンパス 法政レインボーほっとラウンジ https://www.hosei.ac.jp/diversity/info/article-20250718151422/ [開催報告]8月の法政レインボーほっとラウンジ https://www.hosei.ac.jp/diversity/info/article-20250930103413/ HOSEI DIVERSITY WEEKS 特設ページ 法政レインボーほっとラウンジ ~セクシュアルマイノリティや、そうかも?と思っている人&アライのための居場所 https://www.hosei.ac.jp/diversity/event/hosei-diversity-weeks/106394/ ・「DEIセンター イベント in 小金井の開催(10/6~10/7)」 https://www.hosei.ac.jp/diversity/info/article-20250912152651/ ・【10月 11月 市ヶ谷・オンライン開催】法政レインボーほっとラウンジ https://www.hosei.ac.jp/diversity/info/article-20251006104052/ ・「HOSEI DIVERSITY WEEKS 2025 特設ページ(11月・12月 法政レインボーほっとラウンジ 交流会のお知らせ)」 https://www.hosei.ac.jp/diversity/event/hosei-diversity-weeks/
7	100円モーニング	Team Ethical	2024年12月10日から13日の4日間で、多摩キャンパス・エッグドーム2階にあるスローワールドカフェにて、「NPO法人やまほういさんの協力のもと、「たまらぼ佐野川プロジェクト」と連携し、「Team Ethical by ホーカーイノベーションズラボ」主催で「100円モーニング」企画を実施した。SIC教育プロジェクト「スポーツラブ・ラングランプ」からの資金支援を得て、1食あたり500円相当の内容内に100円で提供し、学生に朝食の習慣づけと交換をすることを目的とした。各日3食限定でうち15食は事前予約制とし、当キャンパスのスポーツ健康学科卒業生である管理栄養士の監修のもと佐野川茶を活用した献立を発表し、前半2日間はスコーン、後半はお茶漬けを提供し、広くから利用者を得られ、全日程完売。	学生に朝食の重要性を伝えるとともに、栄養バランスの整った食事を通じて、新たな交流の場としても機能したと感じている。参加者からは「食堂も開いていい時間帯に安価でしっかりと食事を取ることができて有り難かった!」「いつもは朝食を食べないが、このイベントで栄養満点の朝食を取りながら朝から充電する時間を作った」と声が寄せられた。また、開催時間が10時~11時と1限の授業時間と重なっていたため、通常各コマの授業開始時間前に混雑してしまったが、朝食を終えてから充電する時間を作ったので、多くの学生が朝食を楽しめた。今後も、地域と連携しながら学生の生活環境を支える取り組みを継続・発展させていきたいと考えている。	・朝日新聞「think キャンパス」 https://www.asahi.com/thinkcampus/pr_hosei_2/ 法政大学ホームページ https://www.hosei.ac.jp/info/article-20241207182312/?auth=9abb458a78210eb174f4bdd385bcf54
8	PtoB環境チームのマイボトル推進活動	SASH/PtoB環境チーム	現在、海洋プラスチック問題が深刻化しており、2050年には魚の量を上回ると言われています。この現状に危機感を覚え、志有学生によって2022年にマイボトル推進PJが立ち上がりました。活動当初は学内に給水スポットが多く、ペットボトルで補充する以外に手段がありませんでした。そこでマイボトル利用実態調査の実施、SDGs WEEKSではアクリクラスマジックウォーターサーバーを提供していただき、多くの学生が給水体験をしていただきました。これらのことから学内給水器のニーズを確認し、様々な課題を学内部署へ提出しました。調査直後の利用調査では1週間で約300回利用され、休み時間には列ができるほど好評で、多くの学生の需要に応えることができ、廃棄プラスチック削減も貢献することができたと確認しています。上記の活動以外にも、SDGs WEEKSや学園祭・マイボトルコンテストなど、学内外の学生団体、企業との共創企画に積極的に取り組み、日々新しい価値を創造しています。今後も活動が持続可能なものでありますように努力してまいります。	この活動は全くの新しいプロジェクトとして始動したことから、最初の半年間はチームブランディングや学内でのどのようにしてマイボトルを普及させるかをサポート企業様と一緒にして考えていました。それから様々な活動を展開していく上でマイボトル給水スポットの設置必要性を感じ、いくつもの課題をチームメンバー、学内部署と打ち合せを重ね、設置が必要性を実感したことだと思います。これはチームメンバーの最後まで諦めない強さと思いと学内部署との協力が大きかったです。給水ボトル以外の活動でも学内外の学生団体と連携する機会が多くあります。同じ思いをもつて一緒に実現できることが嬉しいです。今後も、地域と連携しながら学生の生活環境を支える取り組みを継続・発展させていきたいと考えています。	①法政大学ホームページ https://www.hosei.ac.jp/sdgs/info/article-20241009134754/?auth=9abb458a78210eb174f4bdd385bcf54 ②法政大学ホームページ https://www.hosei.ac.jp/info/article-20250625120301/?auth=9abb458a78210eb174f4bdd385bcf54 ③X https://x.com/hosei_ptob
9	不登校支援と「登校・学習支援室」の開設	法政大学中学高等学校	法政大学中学高等学校では2024年度に「学校に行きづらい・休みがち・不登校の子の保護者の集い」を2回開催し、今年度も5回の開催を予定している。この集いは、学校に行かない・行きづらいのに行けないといふお子様を持つ保護者を対象とし、同じような経験を持つ仲間と出会い、経済や気持ちを共有できる場所を提供している。登校・学習支援室の運営者も参加し、大きな不安の中いる保護者に寄り添っている。過去に不登校の経験を招き、担当の教諭も登場する。	近年、不登校状態にある生徒や保健室登校の件数が増加していた。ご家庭も教員も不安や負担が大きくなり、どう対応して良いか分からず模索する状況で、何かできないかと思案しこれらの取り組みを開始した。保護者の方は「心が軽くなった」と感想を頂き、状況がすぐに変わらなくとも、保護者の心の重荷を少し下ろすことができたのではないかと感じています。支援室の開設は見切り発車ではあったが、現代福祉学部のご協力のおかげで実現に至りました。本来は、登校できない生徒の居場所としての機能性を発揮したかったが、不登校状態にある生徒が支援室を利用するまでには、いくつもの超えてなかなかない壁があり、支援室でができたからと言って、すぐに利用できるというものがなかったことを痛感しました。しかし、それはこの活動に賛同し、協力してくださる大学職員の方や企業様がいてくださるお陰であることも忘れず、今後も活動を続けていきたいと思います。	(1) 2024年度第1回保護者の集い https://www.hosei.ed.jp/news/event/20241218.html (2) 2024年度第2回保護者の集い https://www.hosei.ed.jp/news/event/20250128.html (3) 2025年度第1回保護者の集い https://www.hosei.ed.jp/news/event/20250430.html
10	法政スポーツを支える学生トレーナー	スポーツ健康学部 泉ゼミ & AT養成課程	本ゼミでは学部設立の2009年から、スポーツ分野で活躍できるアスレティックトレーナーの養成に取り組んできました。その一環として体育会や他の法政スポーツでの学生トレーナー活動を推奨し、これまでに150名を超える卒業生が現場経験を積み、現在も20名以上の学生が積極的に活動しています。さらに、学部内に設置されたAT-Roomを拠点に、授業やミニセミナーで学んだ知識と技術を実践的に活かす環境が整っています。ここでは「アスレティックヨギング」や「リコンディショニング」のサポートに加え、学生同士、そしてアスリートとの間で刺激し合いながら成長する「ピアサポート」が自然に育まれています。また、学生トレーナーは多摩キャンパス・ボーリングスクールのサポートにも携わり、イベント全体の安全と盛り上げに貢献しています。こうした幅広い経験は、アスリートの競技技術を支えるだけでなく、自身の問題解決能力を鍛え、社会で生かせる力へとつながります。その成果は日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー試験の高い合格率にも表れており、学生たちは確実に成長を遂げています。	これまでの取り組みを通じて、学生たちは知識をただ覚えるのではなく、現場で試行錯誤しながら自ら課題を見つけ、解決に挑む力を身につけてきました。基礎的な医学・スポーツ科学的知識を学び、それを自身の競技や学生トレーナーとしての活動に	